

艇長の遺書と中佐の詩

夏目漱石

青空文庫

昨日は佐久間艇長の遺書を評して名文と云つた。艇長の遺書と前後して新聞紙上にあらはれた広瀬中佐の詩が、此遺書に比してはなはつきなみ甚だ月並なのは前者の記憶のまだ鮮かなる吾人の脳裏に一種痛ましい対照を印した。

露骨に云へば中佐の詩は拙悪と云はんより寧ろ陳套を極めたものである。吾々が十六七のとき文天祥の正氣の歌などにかぶれて、ひそかに慷慨家列伝に編入してもらひたい希望で作つたものと同程度の出来栄である。文字の素養がなくとも誠実な感情を有してゐる以上は（又如何に高等な翫賞家でも此誠実な感情を離れて翫賞の出来ないのは無論であるが）誰でも中佐

があんな詩を作らずに黙つて閉塞船で死んで呉れたならと思ふだらう。

まづいと云ふ点から見れば双方ともに下手まづいに違ちがひない。けれども佐久間大尉のは己やむを得ずして拙まづく出来たのである。呼吸が苦しくなる。部屋が暗くなる。鼓膜が破れさうになる。一行書くすら容易ではない。あれ丈だけ文字を連らねるのは超てう凡ぼんの努力を要する訳わけである。従つて書かなくては済まない、遺のこさなくては悪いと思ふ事以外には一画いへどと雖みだも漫りに手を動かす余地がない。平安な時あらゆる人に絶えず附まけ纏まとはる自己広告の銜げん気きは殆ほとんど意識のぼに上る権威を失つてゐる。従つて艇長の声は尤もつとも苦しき声である。又尤もつとも拙せつな声である。いくら苦しくても拙せつでも云はねば済まぬ声だか

ら、尤も娑婆しやば氣を離れた邪氣のない事である。殆んど自然と一致わたくしした私の少い声である。そこに吾人ごじんは艇長の動機に、人間としての極度の誠実心を吹き込んで、其その一言一句を真まことの影の如く読みながら、今の世にわが欺あざむかれざるを難ありがた有く思ふのである。さうして其文そのの拙せつなれば拙まことなる丈真の反射として意を安んずるのである。

其そのうへ上艇長の書いた事には嘘を吐つく必要のない事実が多い。艇が何度の角度で沈んだ、ガソリンが室内に充ちた、チエインが切れた、電燈が消えた。此等これらの現象に自己広告は平時と雖いへども無益である。従つて彼は艇長としての報告を作らんがために、凡すべての苦悶を忍んだので、他ひとによく思はれるがために、徒いたづらな言句げんくを連ねたのでないと云ふ結論に帰着する。又其その報告が實際当局者の参

考になつた効果から見ても、彼は自分のために書き残したのでなくて他の為ひとに苦痛に堪へたと云ふ証拠さへ立つ。

広瀬中佐の詩に至つては毫かうも以上の条件を具そなへてゐない。己やむを得ずして拙せつな詩を作つたと云ふ痕跡はなくつて、己やむを得るにも拘かはらず俗な句を並べたといふ疑ひがある。艇長は自分が書かねばならぬ事を書き残した。又自分でなければ書けない事を書き残した。中佐の詩に至つては作らないでも済むのに作つたものである。作らないでも済む時に詩を作る唯一の弁護は、詩を職業とするからか、又は他人に真ま似ねの出来ない詩を作り得るからかの場合に限る。(其そのほかとぜん外徒然であつたり、気が向いたりして作る場合は無論あるだらうが)中佐は詩を残す必要のない軍人である。しかも其その

詩は誰にでも作れる個性のないものである。のみならず彼の様な詩を作るものに限つて決して壮烈の挙動を敢てし得ない、即ち単なる自己広告のために作る人が多さうに思はれるのである。其内容が如何にも偉さうだからである。又偉がつてゐるからである。幸ひにして中佐はあの詩に歌つたと事実の上に於て矛盾しない最期を遂げた。さうして銅像迄建てられた。吾々は中佐の死を勇ましく思ふ。けれども同時にあの詩を俗悪で陳腐で生きた個人の面影がないと思ふ。あんな詩によつて中佐を代表するのが気の毒だと思ふ。

道義的情操に関する言辞（詩歌感想を含む）は其言辞を實現し得たるとき始めて他をして其誠実を肯はしむるのが常である。余

に至つては、更に懷疑さくらの方向に一步を進めて、其その言辞を實現し得たる時にすら、猶なほかつ且其誠実を残りなく認むる能あたはざるを悲しむものである。微かすかなる陷かんけつ欠は言辞詩歌の奥に潜ひそむか、又はそれを實現する行為の根に絡からんでゐるか何方どっちかであらう。余は中佐の敢あへてせる旅順閉塞の行為に一点虚偽の疑さしはざひを挟むを好まぬものである。だから好んで罪を中佐の詩に嫁かするのである。

青空文庫情報

底本：「漱石全集 第十六卷」岩波書店

1995（平成7）年4月19日発行

初出：「東京朝日新聞 文芸欄」

1910（明治43）年7月20日

※本作品で言及されている広瀬中佐（広瀬武夫：1868年-1904年（戦死））の詩とは、広瀬武夫が旅順港口閉塞作戦出発前に書き残した、次のものである。

「七生報国、一死心堅、再期成功、含笑上船」

※底本のテキストは、初出による。

※底本には、初出のルビを「適宜削除した。」旨の記述がある。

入力：砂場清隆

校正：小林繁雄

2003年4月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

艇長の遺書と中佐の詩

夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>